

令和 5 年 5 月 6 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02494

研究課題名(和文)近代揺籃期における教育関連語彙の翻訳と受容に関する歴史研究

研究課題名(英文) Historical Studies on Translation and Reception of 'educatio' in the 15th and 16th Century

研究代表者

白水 浩信 (Shirozu, Hironobu)

北海道大学・教育学研究院・教授

研究者番号：90322198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は15～16世紀における羅語educatioの用例に関して、諸言語間の訳語対応に注目し、近代以降のeducation用例との不連続性を明らかにするものである。15世紀に羅語作品からの翻訳として仏語educationの初出を指摘した点は本研究成果である。中世の教育言説はeducatioではなくdisciplinaを軸に編成され、フーゴー『修練者の教導』を分析しえた点も本研究の成果である。羅語ではeducatioとdisciplinaの二つの語彙は相容れず、近代揺籃期、両語の混淆が生じ、次第にeducatioはdisciplinaとして語られる語彙基盤の流動化が成立しつつあった点を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

希語 羅語 西欧諸語間の訳語対応に注目する本研究によって、従来、希語パイディアが羅語educatioとは無縁であり、専らdisciplinaによって羅語訳され、その趨勢は中世まで変わらなかった点が確認された点は学術的意義を有する。そのことはまた、中世にeducationの概念がなかったとするアリエスの指摘とその反論に対し、語彙史研究という新たな角度から再考を促す意義をも有する。そしてeducationを学校における知育・徳育と結びつける現代の固定概念が、15～16世紀の翻訳語彙の流動化に由来するという研究成果は、現代社会の教育観を歴史的に相対化し、あらたな視座を啓く意義を有するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to analyze the usage of Latin educatio in the 15th and 16th centuries, focusing especially on the translational correspondence between Greek, Latin, and Western languages. The results of this research are as follows. One of the results of this study is that it is possible to point out the first appearance of French education in the 15th century as a translation from Latin works. It is also an achievement that the medieval pedagogical discourse before that time was organized around the key vocabulary of "disciplina" rather than "educatio," and that St. Victor's Hugo's "De institutione novitiorum" can be presented as a good example of this. In the Latin tradition since ancient times, the two words "educatio" and "disciplina" have represented incompatible worlds, but in the early modern period, the two words became intermingled, and gradually the word "educatio" was being used as "disciplina" to describe a fluid lexical matrix.

研究分野：西洋教育史

キーワード：educatio disciplina 翻訳語の対応 ラテン語 ギリシア語 サン・ヴィクトルのフーゴー プルタルコス 教育言説

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の主題であり対象は語彙基板と表現しうるものである。語彙基板とは、言表の産出、言説の展開を駆動する OS (オペレーティング・システム) としての言説体の基盤を成す、いわばマザーボードに相当するものであり、語彙基板と敢えて言うことで、教育言説そのものを構成し、駆動させている歴史的な条件たる記号 = 言語 = 語彙それ自体を分析の対象としていることを示す。その際、分析される中心的語彙として照準を定めるのは、近代教育言説の揺籃期 15~16 世紀に端を発し、いまや歴史の表層を覆っている 教育(education) という語とその関連語彙である。

日本における 15~16 世紀教育論研究史を溯れば、1960~70 年代にかけて梅根悟・勝田守一監修『世界教育学選集』に見られるような、「ルネッサンス期教育論」が日本語に翻訳され、西洋教育史研究者にも知られるところとなった。訳者の一人、前之園幸一郎が「わが国におけるルネッサンス期教育論についての研究は、いまだ未開拓の分野に属する」(『イタリア・ルネッサンス期教育論』1975 年) と述懐していた通り、当時、15 世紀のラテン語で著された教育論を日本語に翻訳し、研究の先鞭をつけたことは画期的なことである。しかしその後の研究の進展を期した訳者の思いも虚しく、その訳業はもっぱらコンテンツの紹介と汲むべき教訓として受け止められてきたきらいがあり、ラテン語 *educatio* がいかに用いられ、他の語彙といかなる関係にあったのかについては等閑に付されてきた。もとより本書はヴェルジェーリオ、ブルーニ、ピッコロミニといった近代初期を代表する教育論が収録されていたのだが、E・ガレンによるイタリア語訳された史料集(1958)を底本にしたということもあって、重訳という決定的な限界も有していた。本書刊行から 40 年余を経て、ラテン語 *educatio* のターミノロジーを踏まえた本格的な再検討が必要な所以である。

## 2. 研究の目的

本研究は、15~16 世紀におけるラテン語 *educatio* (及びこれに対応した動詞 *educare*) をはじめとした、教育関連語彙の用例を網羅的に抽出することによって、語義・用法の特徴、他の語彙との使い分けについて詳細な分析を試み、17 世紀頃から顕著になる *education* による教育言説の排他的独占という事態の歴史的メカニズムの解明を目的とする。本来、人間のみならず、動物をも含んで、栄養を与え、生を養うことを原義とした *educatio* が、いかなる語彙基板の変化によって教育言説、とりわけ学校教育を念頭においた言説を領導する語彙へと立ち至ったのか、その旋回点(pivotal point)および旋回の構造を解明することが本研究の課題である。

## 3. 研究の方法

前述の通り、本研究はラテン語 *educatio* をはじめとした教育関連語彙に関する用例分析によって、近代初期における教育言説の語彙基板を明るみに出すことを目的としている。特に 15~16 世紀の西欧はルネッサンス期と称されるように、古典ギリシア語・ラテン語で著述された文献が旺盛に翻訳された時代として知られており、このことは本研究が対象とする 15~16 世紀の教育論についてもあてはまる。例えば、プルタルコス『子どもの教育について』やクインティリアヌス『弁論家の教育』をはじめ、古代ローマ時代の教育論がラテン語や俗語に翻訳・翻案され、近代教育言説揺籃期の語彙基板の形成にとって決定的役割を果たしたものと考えられる。翻訳文化の興隆に応じて、ギリシア語 - ラテン語 - 西欧諸語間の語彙対応の試金石となる多言語間辞典も多く編纂された。教育言説を駆動する語彙基板の解明を目的とする本研究にとって、西洋古典の翻訳と多言語間辞典の編纂は非常に重要な手がかりを与えてくれる。近代揺籃期の翻訳文化において、ラテン語 *educatio* がいかなるギリシア語語彙に対応させられていたのか、またいかなる西欧諸語の語彙によって翻訳されていくのかを明らかにすることによって、単なる概念の変化としてではなく、当時の多言語間語彙の写像として把握することが可能になる。このように 15~16 世紀の教育論を翻訳語関係に着目し、晩年のトマス・クーンが科学史革命を捉える際に提唱した語彙史(lexical history)研究にも通じる、独創的手法によって分析することが、本研究の方法の特徴であるといえる。

### (1) 教育関連語彙のラテン語訳および西欧諸語訳の対照作業

本研究が分析対象の主軸として設定する語彙は、ラテン語 *educatio* とその西欧諸語訳であり、*educatio* が別の語彙 *disciplina* (教養) *eruditio* (教養・博識) *institutio* (知的教授) 等とどのように区別され、翻訳されていたかを検証する。その際、ギリシア語で著されたプルタルコス『子どもの教育について』とその各国語翻訳は格好の素材となる。例えば本書のラテン語訳の嚆矢、ヴェローナのグアリーノによる翻訳 *De liberis educandis de Plutarco* (1411→1471) において、ラテン語 *educatio* はギリシア語のどのような語彙に対応しているのか。他のラテン語訳とも併せてギリシア語 - ラテン語翻訳の語彙照合を行えば、15~16 世紀における教育関連語彙に関する基本的視座を得ることが可能である。また同様の照合作業を英語訳、フランス語訳、スペイン語訳等に拡張し、整理・検討していけば、当時のラテン語 *educatio* を軸とした翻訳語彙の照合関係を明らかにすることができる。

### (2) *educatio* を冠するラテン語著作のターミノロジー分析

15 世紀には *educatio* を冠したラテン語による著作が刊行されている。例えばバルバロ *De liberorum educatione* (1415)、ヴェージョ *De educatione liberorum clarisque eorum moribus* (1443)、ピッコローミニ *Tractatus de liberorum educatione* (1450)、ネプリハ *De liberis educandis libellus* (ca.1490) といった著作を挙げることができる。これらのラテン語による教育論を作業(1)から得られた語彙基板における照応関係を参考に読み解き、*educatio*、*disciplina*、*eruditio*、*institutio* といった諸語彙の用例を文献ごとに整理・分析し、各語彙の用法の特徴、語義の傾向、背景となる典拠と目される文献との対応について検討する。

#### (3) 多言語間辞典による語彙基板の検証

作業(1)および(2)を円滑に進めるために、15~16 世紀に出版された希羅、羅英、羅仏、羅西、羅独辞典等の多言語間辞典においてラテン語 *educatio* がいかなる語彙と対応させられていたかに関し確認する。英国初の英羅辞典 *Promptorium Parvulorum* (ca.1440) や *Catholicon Anglicum* (1483)、R・エティエンヌの羅仏辞典(1538) や G・ピュデの希羅辞典(1554)、T・エリオットの羅英辞典(1538) やネプリハのアントニオの羅西辞典(1492) 等を取りあげ、収録されている語彙と訳語の対応を整理する。

## 4. 研究成果

### (1) フランス語における *education* の初出について

2019 年度は、フランス国立図書館の電子アーカイブ、Gallica を中心に、フランス語 *education* の初出をめぐる従来からの学説の検証と批判に向けたデータ収集とその読解・分析をおこなった。

フランス教育科学運動の旗手であったミヤラレは、その『教育科学』(1987)において、*education* の初出を次のように述べている。「1327 年には、ジャン・ドゥ・ヴィニエの『歴史の鏡』(De Vignay, J., *Miroir historial*) にすでにこの語があらわれている。日本でもこのミヤラレの説を鵜呑みにして、フランス語 *education* の初出に言及するものもあるが、この説は本研究の結果、誤りであることが明確になった。ジャン・ド・ヴィニエの『歴史の鑑』は先行する 13 世紀のヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑』の仏語訳のことを指している。当然、ヴァンサン・ド・ボーヴェが “*Educatio et disciplina mores facit*,” (8,102) とラテン語で述べた箇所が、ジャン・ド・ヴィニエによってどのようにフランス語訳されているかが問題になる。ジャン・ド・ヴィニエの写本は(A)1300-1400 年頃の写本、(B)1370-80 年頃の写本、(C)1396 年写本、(D)1495 年の揺籃期本が存在する。(A)~(C)の写本段階では、当該箇所は “*Nourriture et discipline fait bonnes meurs.*” と翻訳されており、*educatio* は *nourriture* で受けられており、ミヤラレ説の不用意さが露呈する。ジャン・ド・ヴィニエの死後刊行された揺籃期本(D)においてのみ、“*Educatio et discipline fait les meurs*” と訳語がすり替えられていることも判明した。もとより揺籃期本(D)は 15 世紀につくられたものであり、ジャン・ド・ヴィニエの翻訳によるものではない。

それでは、フランス語 *education* の初出は 1495 年なのかということもそうとも言い切れない。ヴァンサン・ド・ボーヴェの別の著作、『貴族の子らの教養』(1247 頃)がジャン・ド・ドーダンによるフランス語訳(1401 - 1500 年頃)されている。このジャン・ド・ドーダンによるヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』のフランス語訳こそが、フランス語 *education* の初出例である蓋然性が高い。詳細は、白水浩信・寺崎弘昭「*education* の初出 ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳」(『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 136 号、93-118 頁)において論じてある。フランス語 *education* の初出例が 15 世紀であったという点は、まさに本研究の課題である *educatio* とその翻訳語彙をめぐる状況に変化が生じつつあった証左であり、近代揺籃期のラテン語語彙の用法、語義、訳語対応が流動化し、*disciplina* という語彙の方へ旋回し、やがて *education* を軸とする近代教育言説へと再編される兆候と目される。

### (2) サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』とラテン語 *disciplina*

前述のヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』は、さらに遡及すること 12 世紀、サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』(1125 年頃)を重要な典拠として、随所で逐語引用することで成り立っている文献であった。それゆえ本研究は、15~16 世紀におけるラテン語 *educatio* の旋回以前にまで溯り、*educatio* なき教育論がいかなる語彙によって言表され、領導されるものであったのか、具体的に解明することに向けられた。まずはヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』におけるフーゴー『修練者の教導』の参照箇所を特定し、次にフーゴー『修練者の教導』を精読しながら、12 世紀時点で *educatio* の用例が確認できるのか、もしそうでなければどのような語彙を軸に修道士見習い向けの教導書が編成されるに至ったのかについて具体的な検討がなされた。

フーゴー『修練者の教導』は中世における *disciplina* を論じた決定的著作として評価され、その主著『ディダスカリコン』をも凌ぐ 172 件の写本が確認されている。本研究の主眼である近代揺籃期たる 15 世紀との関連で言えば、フーゴー『修練者の教導』のフランス語訳の写本を閲覧できたことは大きな成果である (BnF, fr. 24863)。こうした西洋教育史研究における画期的な史料収集の進展により、国内ではほぼ手つかずのフーゴー『修練者の教導』の全貌が明らかになってきた。本研究の関心との関連では、興味深いことに、フーゴーは一度も *educatio* を用いることなく、*disciplina* を軸に顕著な教導論(後世の人はそれを教育論と呼ぶ)を書き上げていた。にも拘わらず、フーゴー作品からの引用で埋め尽くされた、ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』では、フーゴーが一顧だにしない “*Educatio et disciplina mores facit*” という偽セネカの『道徳格言集』の一節さえ挿入され、*educatio* は *disciplina* と同格の意義さえ付与

されながら、習慣による道徳性の形成の文脈に引き寄せられている点は興味深い。この偽セネカの『道徳格言集』の“*Educatio et disciplina mores facit*”の一節は、教育言説の語彙基板の流動化の契機的一端となり、やがて中世のフーゴーにはなかつた *educatio disciplina* という新たな語彙基板を生成する。その好例がコメニウスであり、その『最新言語教授法』において、格言集『ポリアンテア』に再掲されたと思しき偽セネカの格言、“*Educatio et disciplina mores facit*”を引用してさえている。“*Educatio et disciplina mores facit*”こそ、ラテン語 *educatio* の意味論的拡張と語彙基板の旋回を用意した歴史的契機となる言表（呪文）であろうと目される。

それでは、中世まで教育言説を領導してきたもう一つの語彙、*disciplina* の用例はどうなっていたのであろうか。古代、中世以来、*disciplina* がどのような語義と用法を担ってきたのかを解明することは、やがて *educatio* がどのような語義、用法を付与されるのかを知る上で、実は重要になってくる。フーゴーの『修練者の教導』は修道士志願者向けの生活指南書であり、修練者の態度、話し方や立ち居振舞い、衣食といった日常生活の隅々にわたって、いかに振舞うべきかについて詳細に扱った文献である。中世盛期を代表する *disciplina* の書とされる本史料は、「中世文明が教育という観念をもたないでいた」というアリエス・テーゼに一石を投じる一方、本書を貫いていたのは *educatio* ではなく、*disciplina* であった点も看過できない。本史料の軸に据えられた *disciplina* に着目し、その語義・用法を古代ローマ喜劇からキケロ、セネカを経て、初期キリスト教における聖書翻訳、教父神学にまで立ち返り検証した上で、キリスト教的 *disciplina* を継承・発展させたフーゴーにおいて、*disciplina* によって編成・継承された教導的なもの(*le pedagogique*) がいかなる視座の下、どのような歴史的な性格を有するものかについて検討できたことは、西洋教育史研究上、画期的な成果であると自負しうる。詳細は、白水浩信「*Disciplina* の系譜学 サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」(『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第139巻、1-68頁)を参照されたい。

(3) 近代揺籃期におけるギリシア語アゴゲーの翻訳語としての *educatio*

(2) で述べたような、中世修道院において継承された *disciplina* の思想は、15 から 16 世紀の近代揺籃期の翻訳文化を経ることで、ギリシア語アゴゲー(*agoge*)を軸に *educatio* を 榮養 から 教導 へと旋回させ、その語義を篡奪・僭称するようになる。そして修道院から学校へとその主要な舞台を移し、近代教育学(*pedagogy*、子ども(*pais*)の教導(*agoge*)の学)の語彙基板を築き上げるにいたる。こうした *educatio* はその内実を *disciplina* によって上書きされ、特に *disciplina* の有した振舞いを型に嵌めて訓練し、道徳性をも涵養するという側面を強調するようになる。

しかし 16 世紀の時点では、事態はなお流動的であった。例えば、最終年度に入手し得た、擬プルタルコス『子どもの教育について』のジャン・コランによるフランス語訳。その表題は、*Le liure de plutarque de ledvcation & nourriture* (1537) というもので、まずはギリシア語の表題にあるアゴゲー(*agoge*)を *education & nourriture* で受けていることは一目瞭然である。ところが、実際の本文翻訳においては、*education* が現れるのは僅か 2 箇所にとどまる。前文などから、本訳書がヴェローナのグアリーノによるラテン語訳を踏襲したものであることが知られるが、グアリーノがアゴゲーを *educatio* と訳した箇所さえ、ジャン・コランは *nourriture* とフランス語訳している箇所もあり、当時、いかに *education* がフランス語として馴染んでおらず、正當にも *nourriture* として受け留められていたかがよく分かる。

本研究では、このようにプルタルコス『子どもの教育について』の各国語訳を西欧教育言説の語彙基板を知る羅針盤として活用し、その訳語対応表を作成することができた。パイデア(*paideia*)は専ら *discipline* 系の語彙で受けられていたこと、トロフェー(*trophe*)が *nourish* 系の語彙で受けられるという傾向が一目瞭然である一方、15 世紀のグアリーノ訳からして、すでにアゴゲーの訳語として *education* 系の語彙へと置き換わりつつあったことも付言すべきであろう。近代揺籃期、子どもの導き(アゴゲー)の学としてのペダゴジー(*pedagogy*)の基軸語彙として、*education* が据えられつつあったことが具体的な実証を伴った形で示された意義は大きい。本研究の成果として、ギリシア語アゴゲーの訳語としてラテン語 *educatio* の意味論的拡張が生じた 15~16 世紀は、近代教育言説の語彙基板を準備し、その後の「教育(*education*)」の思惟のあり方を規定することになる転形期として、極めて重要な歴史的契機であることは強調されてしかるべきである。

#### 引用文献

白水浩信・寺崎弘昭「*education* の初出 ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第136号、2020年、93-118頁

白水浩信「*Disciplina* の系譜学 サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第139巻、2021年、1-68頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 白水 浩信	4. 巻 139
2. 論文標題 Disciplinaの系譜学：サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道大学大学院教育学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 1～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/b.edu.139.1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白水浩信・寺崎弘昭	4. 巻 136
2. 論文標題 educationの初出 ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道大学大学院教育学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 93-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/b.edu.136.93	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------